

2021年8月1日 平和聖日礼拝(聖霊降臨節第11主日礼拝)メッセージ

「慰めの人」

水谷憲牧師

聖書 使徒言行録 9章 26-31節

教会の礼拝というものに行ったことがなかった人、あるいはある教会の礼拝に初めて参加してくれた人が、また次週からも引き続き来てくれるようになるには、一体どうしたらよいものかというのは、どこの教会でも、昔も今も共通してもっている悩みの種であるといえます。私が学生の頃、初めて教会に行った時、自分がどんな印象を持ったかは、もうハッキリとは覚えていないのですが、私の場合は、私が学生の時住んでいた寮の先輩がその教会に行っており、なんか毎週日曜日の朝にたたき起こされて半分おりやり教会に引っ張られていたので、その教会がいいか悪いかということよりも、もうだんだん日曜日の朝に教会に行くこと自体に慣れてしまったという面があるのですが、今時そんな風に教会に連れてこられる人なんて、もういないかもしれません。

ただ、私がその初めて行った教会にそのまま定着したのには、その初めて行った教会で出会った伝道師や、その教会に集ってくる方々との出会いが、私にとって大変大きかったように思います。やはり人を教会に惹き付けるのは牧師の話もさることながら、牧師の人柄であったり、教会の雰囲気とか教会の方々の人柄などによるところの方が大きいように思えます。その意味においては、このコロナ禍の中で、インターネットを介して離れたところからでも礼拝に参加して下さる方が増えたのは、大変嬉しいことでもあるのですが、一方で、大っぴらに教会に皆さんをお招きすることがなかなかできないことは残念でもあります。詩編 133 編にはこうあります。「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び」。神様を礼拝する時、神様のみ前にてひざまづく時に、隣に同じ信仰をもつ仲間が座っているというのは何と嬉しいことかと。本当の気持ちでいえば、インターネットで見て下さっている方々とも、直接お会いして、お顔を合わせて、声を直接聞きながら、一緒に賛美歌を歌って、お祈りを合わせることができれば、とも思うわけです。私たち牧師だけでなく、今ここに映っていない教会員の方々とも、ぜひ出会っていただけたらいい

のになあ、とも思うわけです。

今回の聖書は、使徒言行録9章「サウロがエルサレムで使徒たちと会う」と題された箇所です。サウロとは、ご存知の使徒パウロのヘブライ語での呼び名です。サウロは、当初は非常に熱心なユダヤ教徒であり、キリスト教徒に大変な迫害を与えていたわけです。キリスト者で初めての殉教者であるステファノが石で打ち殺された時にも、彼はその場に立ち会っており、その殺害がよいことだと思っておりました。また、彼自身も家から家へと押し入って教会を荒らし、男女を問わずキリスト者を引き出して牢に送っていたとされています。もう無茶苦茶、キリスト教徒からすればとんでもなく恐ろしい男でした。そして、キリスト者をもっと脅迫し殺そうと意気込んで歩んでいたダマスコへの道すがら、彼は主イエスに出会い、「サウル、サウル、なぜ私を迫害するのか」という言葉と共に目から光を失ってしまったわけです。しかし、ダマスコにすむアナニアという人物がその同じ主の力によってサウロの目を開いたことから、彼は洗礼を受け、今までとは全く正反対に「この人こそ神の子である」とイエスのことを宣べ伝え始めたのだと聖書は語っています。「新型コロナウイルスなんて風邪と一緒にや！」などと言っていたのに、いざコロナウイルスに感染して「皆さん、私は間違っていました、コロナウイルスは恐ろしいです」と死にそうな顔で告白する人と同じ……かどうかは分かりませんが、とにかくそれと同じくらいサウロにとっては衝撃的な出来事、価値観を転換させられる出来事だったのでしょう。今回の話は、そのサウロの回心の出来事があった後、エルサレムでの出来事でした。

冒頭の26節には、「サウロはエルサレムに着き、弟子の仲間に加わろうとしたが、皆は彼を弟子だとは信じないで恐れた」とあります。まあ、それは十分に予想できた結果だったのではないのでしょうか。なぜならサウロは、ほんのつい最近までキリスト者を捕まえては牢に送り、あるいは殺してしまっても構わないという考えを持っていたのであり、また今回サウロが訪れたエルサレムこそ、これまで彼が教会を荒らしてまわり、男女にかかわらず捕らえて牢に送っていた、まさにその都市だったわけです。それは皆が彼の言葉を信じずに恐れるのも仕方なかったでしょう。確かにサウロは今までそれだけのことをやってきたわけなんですから。

しかし、ここでバルナバという男が出てきます。彼は、サウロを連れて使徒たちのところへ案内し、サウロが旅の途中で主に出会い、主に語りかけられ、ダマスコでイエスの名によって堂々と宣教した次第を説明した、とあります。彼は何者なのでしょうか。

バルナバは、本名をヨセフと言いますが、使徒たちから「慰めの子」という意味の「バルナバ」というあだ名で呼ばれていた人物でありました。彼は自分の持ち物であった畑を売り払い、その代金をエルサレム教会の貧しいキリスト者を支えるために献げたとも言われており、11章24節には「バルナバは立派な人物で、聖霊と信仰に満ちている人であった」と評されています。彼は非常に真面目で熱心な上に、その「慰めの子」というあだ名からすると、きっと今で言う「癒し系」の人物だったのかもしれませんが。とにかくその彼が、サウロのことを信用せずに怪しみ恐れる者の中でただ一人だけ、サウロをエルサレムの使徒たちに紹介し、サウロのことを理解してもらおうと一生懸命に本人の代わりに説明までしてあげたわけです。

このバルナバをただのお人好しと見る向きもあるかもしれませんが。しかし、このバルナバの姿は、なかなか私たちには真似しようと思っても真似できない。彼はその姿をもって、「人を徹底的に信じ、引き受ける」ことを示しています。「人を信じる」「人を引き受ける」ということは本当に大変なことで、非常に強い信念や忍耐力が必要となります。サウロはもしかすると嘘をついて皆を信用させ、使徒に近づいてキリスト者を一網打尽にしようとするかもしれない。もしそうだったらどうするんだ。その責任は誰がどうやって取るんだ。それは誰でも考えたでしょう。もしかすると、バルナバでさえも、そんな思いがちらっと心をかすめることがあったかもしれません。しかし、「人を信じ、引き受ける」とは本来、そのくらい命がけのものなんではないでしょうか。到底信じがたいものをこそ、あえて信じる。それは私たちの信仰と同じです。神様がいて私たちを造り、守って下さっている。神様は私たちを愛していて、私たちを救うために、その独り子を十字架にて死なせたのだ。イエス・キリストは私たちの罪をあがなうために、自ら十字架にかかり、復活された。「へえ、そうなんです」とすんなり信じることができないことばかりだけど、あえてそれを信じる。それはこの世の科学的法則なんかを考えているとすぐに揺らいでしまいますから、そん

なこの世のルールや価値観には左右されないほどの、強い信念が私たちの信仰には必要なんです。そしてこのバルナバはそんな命がけの強い信念に基づいた信仰をもって、サウロを信じ、引き受けた。私たちの周りに、そこまで徹底的に自分を信用し、受け入れてくれる隣人や仲間がどれほどいるだろうか。そこまでして私のことを信頼してくれる隣人を持った時、私たちはどれほど嬉しく、力づけられることでしょう。

もちろん、サウロ自身は最初から皆をだますつもりなど全くなかったわけですが、いずれにせよサウロはこのバルナバのおかげで使徒たちとも自由に行き来し、主の名によって堂々と宣教することができるようになりました。さらに、サウロの新しい兄弟となった仲間たちが、サウロの命が危ないことを知ると、彼を守ろうとしてくれるようにまでなったのです。つい最近まで彼がその同じ仲間の命をどれほど危険にさらしていたかにもかかわらず、バルナバによってサウロに対する見方を改めた彼らは、何の迷いもなくサウロを大切な隣人、仲間として守ろうとしてくれるようになったわけです。

毎週、教会に集い礼拝を守っている私たちも教会にあって、今日のこの「慰めの人」バルナバのように、相手がどんな者であっても徹底的に信用し受け入れる存在、たとえその相手に傷つき、がっかりさせられる可能性があるとしても、それを初めから恐れることのない命がけの強い信念に基づいた信仰をもって、他者を徹底的に信用し受け入れる、そんな存在でありたいものだと思います。そしてその姿が、きっと誰かを信仰へ導き、誰かの信仰をますます力づけ、私たちの共同体の発展につなげてゆくものとなる、あるいはそれどころか、この世界全体を平和なものへと作り替えてゆくに違いないことを共に信じ、祈りたいと思います。今世界は疑いや憎しみ、対立、悲しみ、怒りが様々なところからあふれています。もううんざりだ。そんなのはもうたくさん。中途半端なコロナ対策やオリンピックをしたところで、負のエネルギーは消えないでしょう。もっとお互いを尊敬して愛し合うことのできる平和な世界を、私たちは取り戻さないといけない。私たち一人一人が(もちろん相当腹をくくらなければなりません)「慰めの人」バルナバとなって、世界をつなげてゆく働きをしていきたいと思います。